

## ブナと暮らす町が守る自然林

「ブナと生きるまち 雪と暮らすまち 心豊かに生きるまち」。福島県南会津郡只見町の第7次振興計画の基本理念だ。只見町は福島県の西南、新潟県に接する山間にある。豪雪地帯で町の9割をブナを中心とした山林が占め、古来人々は山の恵みを共有し、自給自足の生活を送ってきたという。2014年、ユネスコエコパークに登録された同町を代表する自然林が「恵みの森」。せせらぎや滝などの多くの水辺と、植生豊かなブナ林を楽しみながら歩けるハイキングコースとなっている。

(P22から、作家・藤岡陽子さんによる只見町の紀行文を掲載しています)  
文 / 豊岡 昭彦

写真 / かくた みほ

写真家。三重県鈴鹿市生まれ。スタジオマンを経て、写真家小林幹幸氏に師事、その後独立。直近の写真集として、フィンランドを題材にした『MOIMOI そばにいる』(2017年、求龍堂)、『光の粒子』(2018年、求龍堂)など。 <http://www.mihokakuta.com/>

## 特集 つなげる未来

## Global Vision

ダイバーシティとともに成長しよう

ウスビサコ × 北村 雅良 06

## Opinion File 今明秀

命をつなぐドクターヘリが地域を変える 14

## Opinion File タサン 志麻

日本の食卓にフランスの身近な幸せを届けたい 18

## Focus On Scene ブナと暮らす町が守る自然林 02

Global Headline 寺島 実郎  
デジタル経済下で求められる「知の再武装」とはなにか 05Home of J-POWER 藤岡 陽子  
自然とつくる未来 只見町の挑戦  
～福島県只見町と田子倉電力所を訪ねて～ 22Global J-POWER Spot  
日本とタイ国の友好を深める 30POWER PEOPLE  
J-POWER 四国情報通信所 32Global Eye 日本の魅力 庭師  
村雨 辰剛 34

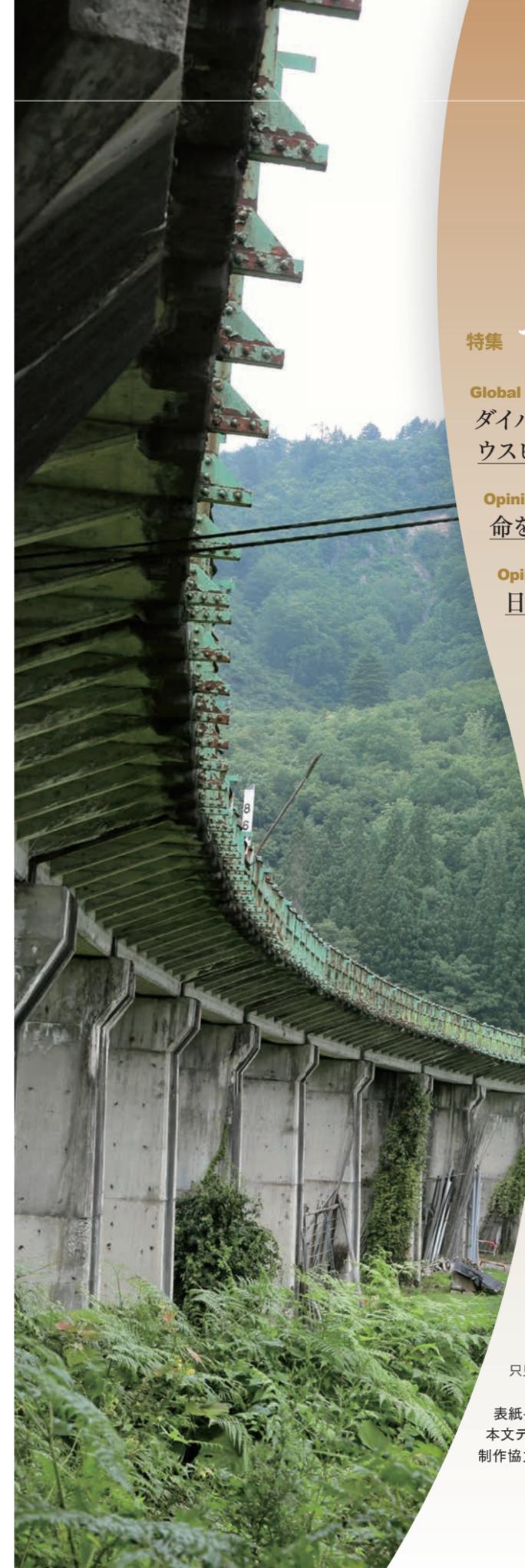
匠の新世紀 株式会社三英 35

Venus Talk サイエンス・イラストレーター 菊谷 詩子 38

「音のソノリティ」を詠む 歌人 小島 なお  
小安峽大噴湯 40

J-POWER NEWS 41

只見川の支流・叶津川を越えて走る只見線の橋梁（福島県南会津郡只見町）。

表紙イラスト：鯉江 光二  
本文デザイン：田村 嘉章、中川 まり、渡辺 美岐  
制作協力：Weber Shandwick（ウェーバー・シャンドウィック）

本年8月、国際決済銀行（BIS）は、2018年の金融機関を除く世界全体（企業、家計、政府部門）の債務残高が180兆米ドル（約1京9000兆円）に達し、リーマン・ショック前の07年の1.6倍に増大したとの調査結果を発表した。

金額が天文学的数字で実感に乏しいが、この数字を見て思うことは、世界的な低金利の時代には、借金をしてでも景気を刺激し、経済に活力を与えることがよいことだとする風潮があること、特に中国をはじめとする新興国でこの傾向が顕著なことだ。

だが、借金による景気刺激策は子や孫の代にまで借金を残す「後代負担」を増大させている可能性も大きく、未来に責任を持つという意味で、本当に正しいことなのかを一步立ち止まって考えてみる必要がある。

さらに、中国などの新興国ではキャッシュレス化が急速に進んでいることも見逃せない。キャッシュレス化は、支払いの感覚が現金とは異なり、経済を活性化させると言われているが、同時に個人の債務を増大させている可能性がある。

折しも本誌が発行される10月は、消費税が10%に引き上げられる月だが、それに伴い日本においてもポイント還元をクレジットカードなどのキャッシュレス決済だけで行うことで、社会全体のキャッ

シユレス化を進めようとしている。

付け加えるならば、カードやスマートフォンやマイレージが、これを発行する企業の債務残高を増大させている可能性があること、またポイントやマイレージが金融のセカンドライン（第2の金融）ともいえる存在になりつつあることにも注目しておきたい。

さらには、世界的な低金利の時代に、マネーゲームと言われるような極端な自由主義経済をいかに制御するのも重要な課題だ。

デジタルエコノミーの時代に生きる我々は、スマートフォンやパソコンがあれば、様々な情報に容易にアクセスできる。だが、瞬時に検索できるこうした情報は細分化・断片化された情報でしかない。こうした情報から世界を俯瞰して見るような「全体知」へ近づく方法は、歴史の流れを理解し、なぜそれが起きているのかという裏側を知ること、そして一歩踏み込んで様々な事象のつながりを考えるというアプローチによって得られる。容易に情報にアクセスできる時代だからこそ、強い問題意識を持って、多くの資料を読み込み、自分の足で歩いて様々な話を聞き、自分の頭で考え、体系的に整理して本質を理解する「知の再武装」が重要なのだ。

## Global Headline

デジタル経済下で求められる  
「知の再武装」とはなにか

## 寺島 実郎

てらしま・じつろう

一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長。1947年、北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究所修士課程修了、三井物産株式会社入社。調査部、業務部を経て、ブルッキングス研究所（在ワシントンDC）に転出。その後、米国三井物産ワシントン事務所所長、三井物産戦略研究所所長、三井物産常務執行役員を歴任。主な著書に「ジェロントロジー宣言—「知の再武装」で100歳人生を生き抜く」（2018年、NHK出版新書）、「ひとはなぜ戦争をするのか 脳力のレッスンV」（2018年、岩波書店）、「ユニオンジャックの矢 大英帝国のネットワーク戦略」（2017年、NHK出版）、「シルバー・デモクラシー—戦後世代の覚悟と責任」（2017年、岩波新書）など多数。メディア出演も多数。



# ダイバーシティと ともに成長しよう

*Grow with our differences*

J-POWER会長

京都精華大学学長

**北村 雅良** × **ウスビ サコ**

設立から半世紀、多様な個性や価値観を認め合うことを旗印に掲げる大学でサコさんが学長に就くや、ダイバーシティが目に見えて前進したと評判を呼んだ。一体どんな来歴で、どんな信念を持った教育者か、興味は尽きない。



## 祖国の未来を背負う 覚悟で臨んだ中国留学

**北村** 日本の大学では外国出身の学長自体が珍しく、昨年4月に京都精華大学の学長に就かれたサコさんは、アフリカ系の出身では本邦初のケースだそうです。

**サコ** そのようですね。私はアフリカ北西部にあるマリ共和国の首都バマコで生まれ、高校卒業後に、まず中国の大学に留学して、そこから縁あって日本へ渡り、京都に長いこと根を下すことになりました。

**北村** 日本語を何不自由なく操られ、京言葉も自然に出るくらいお達者です。ほかに英語、フランス語、中国語にも堪能でいらつしやるとか。

**サコ** マリの家庭では民族ごとの言語を話しますが、学校では公用語のフランス語で勉強するので、言語感覚は鍛えられるかもしれません。マリの教育制度は独特で、小学校から大学まで学費は国の全額負担である代わりに、進級・進学の手帳が非常に高い。成績が悪ければ小学生でも留年させられ、3度留年したら退学処分。中学、高校への進学時には国家試験があります。だから、年

に追われる日々で、これでいいのかと疑心暗鬼に苛まれてきましたが、ちょうどその頃、マリにも債務危機や民主化運動の波が押し寄せて、帰国を先送りしたほうがいい状況でした。それならと腹をくくり、中国で大学院まで進み、その後91年に、確たる伝手もないまま日本での学生生活に飛び込んだのです。

## 研究室仲間が受けた ベトナムとマリの衝撃

**北村** 来日後は京都大学の大学院に進まれたとか……。

**サコ** 最初の半年間は大阪の日本語学校に通い、自分がやりたい研究分野の受け入れ先を探しました。京都大学の先生を見つけて直談判したら、半年以内に大学院入試に通うことを条件に受け入れてくださったのです。研究室の教授や院生はいい人たちばかりで、研究を進める環境も申し分ありませんでした。

ただその中で、私たち留学生がやるとすると「お客さん」扱いされるのが残念でした。日本語が不十分な私は皆さんと対等に渡り合って共同研究もしたいし、研究成果の競い合いもしたい。そのために日本語能力に磨きをかけて、日本文化への理解

## マリの教育制度は独特。 学費は国が全額負担する代わりに 小学生でも留年させられます。

齢の離れた同級生は珍しくなく、日本では「同学年」同い年」が常識と聞いて耳を疑いました。

**北村** 激しい競争にもまれて最高学府へ上り詰めるのも大変でしょうに、サコさんの場合は国の未来を背負う覚悟で、さらに険しい留学の道を選ばれた。最初、中国の大学に進まれたのは、どんな経緯でしたか。

**サコ** 高校卒業時の成績上位者を国の奨学生として派遣する制度があり、運よくそれに選ばれたのですが、どこの国へ行くかは国が決めます。たまたま中国に決まり、当時建設ラッシュにわいていた中国で建築学を修めれば、帰国して祖国の発展に寄与できるだろうと思いました。

**北村** なるほど。実際、サコさんが留学された1985年当時の中国は、改革開放政策で経済が活気づく

**サコ** 加えて対等という意味には、外国人の私が京都大学へやって来て

## 最高学府へ上り詰めるのも 大変なのに、さらに険しい 留学の道を選ばれたのですね。

多くを学ぶ機会を得たのと同様に、研究室の仲間たちも大学に通うだけで完結せずに、もっと広い世界を見て学んだほうがいいのではということも含まれています。それで、後に私が研究リーダーを務めた時、院生たちを引き連れてベトナムへ行きました。そしたら、皆さん大変なショックを受けていました。経済発展で後れをとってはいても、社会を

一方、民主化運動が台頭して世情が騒然とした時期に重なります。平穩無事に勉学に勤しむのは難しくなりましたか。

**サコ** 身の危険を感じる出来事もありませんでしたが、それより建築学や建築デザインの研究という所期の目的を果たせず歯がゆく思いました。学生の身ながら、建築ブームに乗って実際の詳細設計や各種図面起こしなど

突き動かすダイナミズムとか、人々が未来志向でどれほどエネルギーを注いでいるか、身の丈で感じ取れたのだと思います。この顛末に味をしめ、次には教授やOBまで動員して、いよいよ故国マリへ連れて行ったら、一同さらに衝撃を受けていました。

**北村** それはそうでしょう。同じアジアのベトナムで仰天するぐらいだから、アフリカの大地にはさらに肝を潰しただろうと思います。

**サコ** 正直、どこが衝撃的か私にはピンと来なかったのですが、現地の人々の感覚とか、空間に対する向き合い方とか、いわゆる近代合理主義



Global  
Vision  
Oussouby Sacko  
Kitamura Masayoshi



ウスビ サコ(Oussouby SACKO)  
1966年、マリ共和国の首都バマコ生まれ。高校卒業後の1985年中国へ留学、南京東南大学で建築学、同大学院で建築デザインを専攻。1991年来日し、京都大学大学院建築学専攻博士課程修了。2001年、京都精華大学人文学部講師に就き、同学部教授、学部長を経て2018年学長に就任。住宅と生活様式の相関を様々な国で調査、行動観察から良好な人間関係を築く環境を研究。人の動きやコミュニティの特徴から空間を考察する「空間人類学」や、多様な価値観を認め合う社会のあり方を提唱している。

の立場では説明のつかない何かを、研究者の嗅覚で察知したのでしょう。うちの教授が「マリの人たちは論理構造を学んでもいないのに、実に巧みに空間を有効活用している。それは多分、人間の本能に根ざしたものだ」と感服されて、ついには「君は日本の研究よりもマリの研究をしろなさい」と助言をくれました。

### 京町家の打ち水で測る コミュニティの変遷

**北村** 研究者としてのサコさんの立ち位置が、今のエピソードから垣間見えます。建築といっても大きなビルなどではなく、人が住むところ、空間にフォーカスされているのですね。

**サコ** そうです。住まいを単に「箱」と捉えずに、人がどんな行為をするか、どんな道具を持ち込むかと、人の動きを中心に空間を考えていく。その発想の原点は、実はマリの伝統的家屋（\*1）にあります。大きな家の中心に中庭があって、幾つもの部屋がそれを囲み、大家族が中庭を上手

とも伺いました。これほどういったご研究ですか。

**サコ** マリでの調査研究の流れで、研究室の研究や先輩たちの研究でも日本人の空間の捉え方や地域の共存関係を調べてみよう。ご存知のように、京都では玄関の掃除の最後に、玄関前の道に水を撒く「打ち水」をするでしょう。特に町家では、道地を挟んだ家々がコミュニティを形成しているのですが、近年町家に他所からの転入者が増えるにつれて住民間の不協和音が聞かれ出した。そういう町家の変遷について、打ち水をする範囲を実際に計測することで、詳しく分析しました。

**北村** また突飛なことを思いつかれましたね。で、どんなことが判明しましたか。

**サコ** 研究室の聞き取り調査では、お互いに水を撒き合う家同士は「うちらは」とか「うっところは」と呼び合っていて、水を撒かない家を「あそこは」と呼んで他人行儀なんです。つまり、打ち水の範囲の実測値と住民への聞き取り調査によって、打ち

にシェアしながら暮らしてきたのです。

**北村** 中庭で暮らすとは、つまり日中は中庭で食事をしたり、家族で団欒したりして、陽が落ちて涼しくなったら部屋の中に入ると……。

**サコ** はい。この「中庭の領域研究」

### マリの伝統家屋では 中庭を上手にシェアして 空間を有効活用します。



#### Keyword

- ※1 マリの伝統的家屋  
方形の敷地の中央に中庭（共用庭）があり、住民は場所を融通し合って炊事、洗濯などをする。日中の大半を中庭で過ごし、夜間は周囲に配された10～20の個室に分かれて就寝する。
- ※2 中国の「四合院」  
北方中国の伝統的家屋で、方形の中庭を囲んで東西南北に建物4棟（各3室）が配される。北棟に主人、東西棟にその子弟、南棟に使用人が住むなど居住形態はマリと異なる。

Global  
Vision  
Oussouby Sacko ×  
Kitamura Masayoshi

は私の論文テーマになり、研究室の一行でマリを訪れてから毎年、現地調査に通いました。近年では大家族に限らず、他人同士で中庭をシェアする共同住宅も増えて、中庭で調理から食事、団欒など、いろんな用途に使い分けています。これは空間の有効活用という点で、日本の「茶の間」に近いと思いませんか？

**北村** 確かに畳敷きの茶の間は変幻自在で、卓袱台を置いたら茶の間ですが、布団を敷けば寝室に早変わりします。マリの中庭と日本の茶の間に共通点を見出した、その感性に感心します。

**サコ** マリの中庭のある共同住宅と、非常によく似た形態のものが中国の「四合院」(\*2)ですが、近代化政策の中でほぼ消滅してしまっただけが惜しまれます。いずれにせよ、単機能の部屋をどんどん継ぎ足していく西洋建築とは一線を画して、アジアやアフリカの建築様式にはとても共通点が多いと感じています。

**北村** 伝統的建築に関連して、サコさんは地元・京都の「町家」を熱心に調べたミニユニティ、文化といったソフト面まで見極めていくことです。だから、建築のあり方や目的は時代とともに変わって当然なのです。

**北村** コミュニティ重視、人間性回帰の建築という思いを込めて、サコさんは「空間人類学」というものを提唱されています。現代社会の近代化を担ってきたのは西洋建築ですが、それが行き過ぎて人間本来の生活にそぐわない面も出ている。その反省に立って伝統的な建築様式を再評価し、価値観の転換を促すための研究と考えるとよいでしょうか。

**サコ** その通りです。私が注目しているのは、そうした変化の潮流が日本やマリばかりでなく、欧米先進諸国も含めてグローバルに起こりつつあることです。近代の建築様式が効率化を追い求めてきたのと対照的に、各国各様の独自文化に根ざした多様化する建築様式が見直される可能性が高い。その意味で、建築や建築学においてもダイバーシティ（多様性）が次代の大きなテーマになるだろうと思います。

### 日本の茶の間は変幻自在で 卓袱台を置いたら茶の間、 布団を敷けば寝室です。

水の重なりが大きいほど地域の人間関係が濃密だとわかったのです。

#### ダイバーシティが 次代の大きなテーマに

**北村** 打ち水とは違いますが、私の住まいは東京の郊外にあり、た

まに雪が積もると家の前の道の雪かきをします。それをどの範囲までやればいいのか、悩みどころでしてね（笑）。

**サコ** よくわかります。結局、建築を学ぶとは、建物や構造物などのハード面に限らず、人間関係とかコ

日本と世界の人々を幸せにするために働こう！  
それも私の口癖の1つなのです。



仕事は手段であって目的ではない。  
誰を幸せにしたいかが問われます。

**北村** ダイバーシティといえば、サコさんが学長をされている京都精華大学は半世紀も前の創立時から、なによりも多様性を重視してきたそうですね。

**サコ** 私たちの大学の先人たちがその点で開明的だったのは事実で、私が本学に身を投じた理由もそこにあります。

この理念を確かな実践につなげるために、私は学長就任にあたって「ダイバーシティ推進宣言2018」を策定し、その定義を「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」として、活動方針や具体的な取り組みも示しました。

**北村** サコさんが学長に就任されたという一事をもってしても例証済みだと思いますけど、京都精華大学にダイバーシティがまだ足りないとお考えなのですか。

**サコ** 未だ道半ばです。例えば、アフリカ系初の学長を珍しがって本学に興味を持ってくださるのはありがたいことですが、私にすれば「アフリカ出身」という型枠に自分を嵌め込みたくはありません。違いにあぐらをかいて、ただ仕事を割り振っているようなリーダーで

はつまらないですから、誰よりも仕事を金輪際手を抜かない。違いとともに成長していく「Grow with our differences」を、学生も教員も含め、すべての大学構成員に励行してほしいのです。



上/京都精華大学は芸術・デザイン・マンガ・ポピュラーカルチャー・人文の5学部と大学院からなる。下/京都でフィールドワーク中のウスビ サコ学長。人文学部総合人文学科や大学院デザイン研究科などで教鞭も執る。写真提供：京都精華大学

違いを認め合い、  
ともに成長する先に未来が

**北村** 今の標語で思い出しましたが、私がJパワールの社長として新入社員に訓示を垂れていた頃、必ず持ち出したのが「諸君、金太郎館には

Global  
Vision  
Oussouby Sacko ×  
Kitamura Masayoshi

なるな」という言葉でした。生まれも経歴も違う若者たちが、電気をつくりたい一心で集まった会社なのだから、自分を自分たらしめている違い、個性を持ち続けて、さらに磨きをかけなさいと。だって、社員の顔つきが皆同じ会社なんて面白いはずがないじゃないですか。

**サコ** いろんな個性が混在する、価値観が複層化している組織はむしろ健全で、その違いを武器にして、互いに認め合いながら協働することで成長していくことができます。大学も会社も、どんなに多様な個性でも包み込めるような土台や環境をつくる努力を惜しむべきではありません。

**北村** 会社でいうと、若手社員とベテランでは経験や価値観に相当なギャップが生じてきますから、互いに認め合って協働するのが容易でなくなる。上意下達式のお仕着せはもつての外として、年代的な多様性にどう対処すべきとお考えですか。

**サコ** ダイバーシティにありがちなのは、マイノリティ（社会的少数派）を優遇することで穴埋めをする対処法で、実はそれが逆に彼らを孤立させる諸刃の剣なのです。私の考えでは、マジョリティ（多数派）の認識を変えることのほうが重要です。会社でいえば、社歴の長い人がおちいりが必要な固定観念をほぐすような働きかけが有効だと思います。

**北村** 少数派を押し込めているのが多数派の無意識だとすると、それに気づきを与えない限り、何も変わらないわけですね。当社でもぜひ参考にさせていただきます。

最後に、サコさんの人生訓のようなものがあれば、ご紹介いただけませんか。

**サコ** 私自身が仕事に向き合う Motto をご紹介すると、人として向上心を持ち続け、仕事を人生の手段として捉えて、自分を成長させたいと常に願っています。つまり仕事は手段であって目的ではない。仕事を通じて誰を幸せにしたいか……自分か、家族か、世の中の人か。そのように目的がきっちり定まれば、仕事が無性に楽しくなるのではないのでしょうか。

**北村** 「日本と世界の人々を幸せにするために働こう！」も私の口癖の1つです。違いを認め合い、ともに成長する先に、輝く未来が待っている……そうありがたいものです。本日はありがとうございました。

# 命をつなぐドクターヘリが 地域を変える



今明秀  
八戸市立市民病院院長

## 地域医療を変えた サンダーバード作戦

青森県にある八戸市立市民病院の救命救急センター（八戸ER）。ドクターヘリ（※1）の出勤回数は年間500件、ドクターカー（※2）の出勤件数は1500件、両者を合わせた人口当たりの件数は日本一と、日本屈指の救命救急医療体制が整っている。ドクターヘリや「移動緊急手術室」を搭載したドクターカー、そしてこれらを使いこなす若手医師の育成システムには、全国から注目が集まっている。この救命救急医療体制をゼロから立ち上げたのが、同病院院長の今明秀さんである。「20年前、埼玉県川口市立医療センターで救急医療に携わっていた頃、ドクターヘリの活躍を知りました。ドクターヘリを使えば、医師による治療開始時間が格段に早くなり、その結果多くの『防ぎ得る死や病症の重篤化』

を減らせます。患者さんの社会復帰も早くなるし、医療費も節約できます。ドクターヘリはすごいものだと感じました」

ドクターヘリの華々しい活躍を目にした今さんは、国民健康保険大間病院（青森県大間町）に勤務していた日々を思い出した。当時、青森県にドクターヘリはなく、大間町から青森市内の病院へ患者を搬送するのに、救急車で3時間を要した。救急隊員も医師、医療スタッフも皆大変な思いで奮闘していたが、残念ながら手遅れとなってしまうケースも多かった。

「青森県は防災ヘリコプターを導入しましたが、発着場所などの制約があったため、それが使えるのは大間町と青森市の間（約150km）、つまり超長距離の場合に限られています。大間町とむつ市（約49km）、あるいはむつ市と野辺地町（約58km）などの中距離の搬送には使えなかったのです。その点、ドク

ターヘリなら、長距離も中距離もカバーできます。救急の現場にはドクターヘリが必要だと思いました」

その後、今さんは八戸市立市民病院の救命救急センター所長として赴任。さつそく、ドクターヘリの導入に向けて動き出したが、その道のりは容易ではなかった。

病院内だけでなく、地域を含む新しい救命救急医療体制をつくり上げなくてはならない。医療スタッフや救急隊員の指導・育成、八戸市役所や青森県庁との交渉、さらには厚生労働省や国会議員への働きかけなど、越えなければならぬ山はいくつもあった。

「一番大切なのは、患者本位ということ。『市民のため』という義の旗を背負い、何度でも繰り返し声を上げ続けました」

青森県初のドクターヘリ運航が実現したのは、2009年3月。今さんがドクターヘリの導入を訴え始めてから5年目のことだった。

次に、今さんはドクターカーの導入に着手した。ドクターヘリの出勤は天候に左右されるし、運航時間も8時30分から日没前までと決められている。また、場所によっては着陸できない場合もある。ドクターヘリだけでは対応できない空白の時間や地域に一刻も早く救命救急医を投入するために、ドクターカーがどうしても必要だと考えたのだ。

「救急の現場では、速さが重視されます。手当てが早ければ重症にならずに済むケースも多々あります。ドクターヘリとドクターカー、つまり空路と陸路を使って、医師がより早く患者さんのもとに駆け付け治療を開始することが大切なのです」

名付けて「サンダーバード作戦」。これによって、さらに多くの命を救い、より多くの患者の社会復帰が可能となった。

## 「移動緊急手術室」で 救命率が劇的に上昇

「サンダーバード作戦」の次に今さんが目指したのは、病院と同じような手術を可能にする「移動緊急手術室」の実現だった。ワンボックスカーに人工心肺装置などの手術用医療器具を搭載し、医師を同乗させて事故や災害の現場に急行し、その場で手術を開始しようと考えたのだ。

しかし、手術は設備の整った「病院の手術室」で行うのが当然とされており、現場で人工心肺の手術を行うことを前提とした手術室



2009年に運航が開始された青森県初のドクターヘリ。消防から出動要請が入ってから約4分で出発する。

### ※2ドクターカー

救急専門医と看護師を乗せ、救急車との待ち合わせポイントや救急現場へ向かう専用の車。

### ※1ドクターヘリ

救急医療用の医療機器等が装備されたヘリコプターで、医師および看護師が同乗し救急現場等に向かい、現場から医療機関に搬送するまでの間、患者に救命医療を行える。1995年の阪神大震災をきっかけに導入が検討され、日本では2001年から運用開始。2019年9月現在、43道府県、53機が運航中。



「防ぎ得る死をなくすことが第一目標。重症な人も何とか助けたい」と今さん。

付きのドクターカーは前例がなかった。今さんは、またもや前例主義の壁を打ち破るべく奮闘。16年、厚生労働省の許可を得て、実現にこぎつけた。日本初の「ドクターカーV<sub>3</sub>」の誕生である。

「子どもの頃に憧れた特撮テレビドラマ『仮面ライダーV<sub>3</sub>』にちなんで、名付けました。これまでの空陸同時出動のサンダーバード作戦に加え、ドクターカーとV<sub>3</sub>、救急車による陸の合同サンダーバード作戦も可能になり、救命率が急激に上がりました」

例えば、119番通報があった場合、まず直近の消防の救急車が発発、八戸ERからは

これも診たことがある、こういうケガは何例手掛けた……と、そういう経験の広さが勲章であり、救命救急医の価値でもあります。何しろ、突然、運ばれてくる患者さんに対応しなければなりませんから」

救命救急医療体制がしっかり機能している病院は、実は医療全体の質がよく、充実しているという今さん。なぜなら、救急医療グループ（ER）が様々な患者を引き受けることで、内科や外科、消化器科、耳鼻科などの専門医は自分の専門分野にパワーを集中することができるからだ。

「うちの病院では、ERは頼れる存在だと思います」

現在、今さんが目指しているのは、社会全体を診る「大医」だという。

「古い時代の中国の言葉らしいのですが、『小医は病気を治し、中医は患者を治す、大医は社会を治す（※4）』という言葉があります。救命救急医も、若い頃は目の前の患者さんの病気やケガを治そうと努力します。それが小医です。やがて経験を積んでくると、患者さんの病気だけでなく、その背景にあるものまで心を砕く中医になります。さらに一段階進み、社会全体の医療について深く考え、必要な新しい仕組みやルールをつくらうという方向に目を向けるようになる医者が大医であると、私は解釈しています」

今さんは、医者全員が中医になるわけではないし、大医を目指すわけではないという。

医師を乗せたドクターカーが現地に向かい、V<sub>3</sub>は十分な手術スペースが確保できる中継地点へと向かう。救急車とドクターカーが合流したら、患者を収容した救急車に医師が乗り込み、患者の治療を行いながらV<sub>3</sub>の元へと向かう。V<sub>3</sub>に合流した後、医師はすぐに人工心肺などの救命措置を施し、その後、病院へと搬送するのだ。

心肺停止した患者の生存率（※5）は、心肺停止時間が長くなればなるほど、低くなっていく。10分を過ぎると、生存は絶望的になる。つまり、機動力を上げていかに迅速に救命措置をとるかが、患者の生死を分けるポイントとなる。

「今後、『移動緊急手術室』をもっと改良していきたいと考えています。今のV<sub>3</sub>のような車でもなくてもいいのです。例えば、プレハブや廃校などを利用して、医師が手術できる前線基地をつくるという考え方もあります。そういう基地、いわゆるアジトが複数あれば、病院から遠い場所での救急措置がさらに効率よく行えるでしょう。ただし、これは現在の医療法の壁がありますから、どう乗り切っていくか、考えていかなければなりません」

### すべては地域住民のために 救急医療からつながる未来

八戸市立市民病院には、救命救急医療を学ぶために全国から若い医師が集まっている。今さんは、彼らの育成にも力を注いでいる。



「移動緊急手術室」で懸命に治療する医師とスタッフ。時間との闘いが続く。



今さんの背中を見て、多くの若手医師やスタッフが育っている。

「ドクターカーで現場に行って人工心肺の手術をするには、技術が必要です。まずは設備の整った病院でたくさん経験することが基本ですが、その機会はそれほど多いわけではありません。そこで、人形を使って練習したいという声が上がりました。今では、若手を中心に週1回、人形を使ってV<sub>3</sub>のシミュレーション訓練を実施しています。おかげで経験値が低かった若い医師はもちろん、皆の技術が上がってきました」

カッコいいドクターヘリやドクターカーで救急医療の研修ができる集まってくる若手医師たち。報道やドラマなどでも救命救急の「カッコのよさ」はさかんに取り上げられ、今さんもあえて「サンダーバード作戦」、「ドクターカーV<sub>3</sub>」といった派手なネーミングで人目を引く作戦を展開している。八戸ERがマスクミで取り上げられる機会が多くなれば、若手医師へのアピールとなり、地方都市の医師不足解消にもつながると考えてのことだ。

しかし、もちろんそうした「カッコのよさ」だけでは救命救急医は育たないし、実際の仕事も務まらない。今さんは、八戸ERの教育体制をしっかりと整え、十分な研修ができて実力をつけられる学びの場として充実させたいと考えている。

「救急医療は守備範囲が広いのが特徴で、子どもからお年寄りまで幅広い年代の患者さんを診るし、肉体的な病気やケガだけでなく、精神病の患者も診る場合もあります。あれも

それでも、若手の医師には「中医になれ」とアドバイスしている。「例えば、患者さんの背景について思いを巡らせば、何がきっかけだったのか、どういう経緯でそうなったのか、本人や家族の話をじっくり聞くこととなります。担当するすべての患者さんに中医として接するのは現実には不可能です。ですから、『今回のこの患者さんに関しては、中医として向き合ってみなさい』と声をかけています」

今さんは自ら見本を示すことで、中医とは、大医とはどういうものか理解して、後輩が続いてくれると信じ、願っている。どうしたら医師不足の問題から脱却できるのか。どうしたら少ない人数の医師団で充実した医療体制をつくれるのか。救命救急医としてドクターヘリで空を飛びつつ、大医としての視点で地域医療を見つめる今さんの挑戦は、今日も続いている。

取材・文／ひたいますみ 写真／斎藤泉 P17の写真はご本人提供

こん・あきひで 1958年、青森県生まれ。自治医科大学卒業後、青森県立中央病院での臨床研修を経て、倉石村診療所、野辺地病院、六戸町国民健康保険病院、国民健康保険大間病院、川口市立医療センターに勤務後、2004年に八戸市立市民病院の救命救急センター所長として赴任。2009年、念願のドクターヘリ運航、その後、ドクターカー、「ドクターV<sub>3</sub>（移動緊急手術室）」の運用も開始。2017年4月に同病院院長となった後も、第一線に立ち、後進の指導・育成に力を注いでいる。著書に「青森ドクターヘリ 劇的救命日記」（2014年、毎日新聞社）など多数。

八戸ドクターヘリブログ <http://doctorheliblog97.fc2.com/>

※3 心肺停止時間と生存率 1分なら97%、3分なら75%、4分なら50%、5分では25%まで低下する。

※4 「小医は病気を治し、中医は患者を治す、大医は社会を治す」 出典は諸説あり、はっきり分かっていないが、中国の六朝時代の陳延之の著書『小品方』に「上医医国、中医医民、下医医病（＝上医は国をいやし、中医は人をいやし、下医は病をいやす）」という語句に由来すると考えられる。唐代の名医・孫思邈の著書『千金方』巻一「診候」にも同様の表現が見られる。



# 日本の食卓にフランスの身近な幸せを届けたい



家政婦  
**タサン 志麻**



築60年以上の民家を夫婦でリフォームした自宅キッチン。タイル風の壁はブリキの一枚板。レトロで味がある。

## プロの料理人から伝説の家政婦へ

「家政婦」と聞いて、何をイメージするだろう。家事を代行するハウスキーパーか、はたまたテレビの人気ドラマだろうか。

「予約の取れない伝説の家政婦」として引つ張りだこのタサン志麻さんは、そのどちらでもない。

ミシュラン（※1）の三つ星レストランで本場のフランス料理を学び、日本でも有名フランス料理店やフレンチビストロなどで15年間、料理のキャリアを積んだ。

その後、2015年にフリーランスの家政婦に転身すると、フランスの本格家庭料理をつくり置きしてくれる凄腕として人気となり、「予約が取れない伝説の家政婦」とまで呼ばれるようになった。

その評判はメディアの目にもとまった。テ

レビ出演や料理本の執筆依頼があとを絶たず、食品メーカーや自治体から新商品や町おこしのためのレシピ開発を任されることもある。また、「つくり置きマイスター養成講座」（※2）と称する自身の料理教室も盛況だ。まさに時の人である。

ところが当の本人はといえば、「いえいえ、私など。料理人にはもっと素晴らしい方がたくさんいらつしやいますから」と拍子抜けするほど謙虚だ。どうやら謙遜ではなく、自分は料理人の道をドロップアウトした「落ちこぼれ」という自戒を込めてのことらしい。聞けば、今でこそ脚光を浴びる異色の経歴についても、「自分のやっていることを親にも友達にも言えない時期があった」と話す志麻さん。

仕事が生に認められ、プライベートでは優しいフランス人の夫と0歳と2歳の2人の息子、2匹の猫と暮らす。その充実した生活ぶ

りは、憧れのライフスタイルにしか見えないのだが。

それにしても志麻さんは、なぜプロの料理人を辞めてしまったのだろうか？

何しろ「料理界の東大」といわれる辻調理師専門学校（※3）と同グループのフランス校を卒業し、フランス校では料理に対する姿勢や、独学で身に付けたフランス語の能力を買われ、ブルゴーニュ地方のヴォナスという村にあるミシュラン三つ星レストラン「ジョルジュ・ブラン」（※4）での研修を許された数少ない日本人なのだ。

日本に帰国後も持てる時間とエネルギーのすべてをフランス料理に注ぎ、あまりの厳しさからスタッフが長続きしないことで知られる都内の有名フランス料理店に志願して、初の女性コックとして3年間みっちり働いた。さらに食品メーカーの研究室での勤務を経て、オーナーシェフと二人三脚で営むフレンチビストロで約10年もの間、朝から晩まで料理に没頭した。

「体力的にはきつかったし、シェフも厳しかったけれど、店のことが好きだったし、何よりもフランス料理が好きだったので、楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。それに私、体力と根性には自信があるんです」

そう言って笑う志麻さん。だがその頃、実は人知れずフランス料理に対する違和感を抱えていたというから不思議なものだ。

## 本当に好きなのはフランスの家庭料理

大好きなフランス料理をとことん追究してきた志麻さんは、味や火の通り具合、盛り付けなどあらゆる面で完璧を求められる洗練されたフランス料理を手がける一方で、素朴な



じゃがいものピュレの肉巻き(左)と鶏手羽元のポトフ(右)は仏家庭料理の定番。撮影:三木麻奈

フランスの家庭料理にもひかれていた。違和感の正体はこれだった。

きっかけは辻調理師専門学校のフランス校にいた19歳の時、ホームステイ先で招かれた一般家庭の食卓だった。

「あの時の衝撃は今でも忘れられません。まずソファに座って、アペリティブ（前菜）を

つまみながらシャンパンなどの食前酒をいただきます。そこですでに1〜2時間。そうこうしているうちにメインのお料理ができ上がるので、今度はテーブルに移動して、さらにワインや会話を楽しみながら、ゆっくり食事をいただくのです。私、辻調理師専門学校時代から料理だけでなく、フランス文化にすぐ興味があったので、フランス文学や映画を山ほど見ていたので、「これ、本や映画で見たシーンだ!」とうれしくなっていました」

彼女が目を見張ったのはそれだけではなく、彼女が目を見張ったのはそれだけではなく、女性だけでなく男性も料理に参加していたことにも感銘を受けた。

「私の実家ではお母さんが台所に立ちっぱなしで料理をして、後片付けをするのもお母さん。だから家族全員で食事をする時間が短いです。日本の家庭には多いですね。ところがホームステイ先のお母さんは一緒に食事やお酒を楽しみながら、時々キッチンへ行っって煮込み料理の鍋やオーブンの中を覗き、お父さんも盛り付けをしたり料理を運んだり、後片付けも手伝ったりして、いい文化だなと思いました」

志麻さんはフランス人の会話にも感心したという。

「夫の実家もそうですが、フランスでは家族や親戚が集まって食事をする時、大人も子どもも関係なしに言いたいことを言って、互いの意見を認め合い、みんなで笑う。一方、自分の育った日本の家庭は厳格な祖父がいて黙

### ※4 ジョルジュ・ブラン

ブルゴーニュ地方・マコン近郊のヴォナス村にある三つ星レストラン。家業を継いだジョルジュ・ブランがシェフを務める。他にもビストロやスパホテル、ブティック、パン屋、ケーキ屋などが軒を連ねる一帯は通称「ジョルジュ・ブラン村」と呼ばれる。

### ※3 辻調理師専門学校

学校法人辻料理学館運営の辻調グループ校のひとつ。大阪市阿倍野区が拠点。創設者の辻静雄氏が1960年に辻調理師学校を開校後、規模を広げ、1980年にフランス校も開校。西洋料理、日本料理、中華料理、製菓を学べる「料理界の東大」との異名を持つ。

### ※2 つくり置きマイスター養成講座

野菜ソムリエ協会主催の料理講座。基本的なつくり置き料理12品を2時間で作ることを目標に、献立の組み立てから調理の段取り、盛り付け、保存方法まで基本的なスキルをマスターできる。

### ※1 ミシュラン

フランスの大手タイマーカーが出版する『ミシュランガイド』のこと。世界の都市のレストランを覆面調査で三つ星評価する歴史あるグルメ本。



フランスの食文化を探究する一本心の通った志麻さんの言葉には力がある。

余談になるが、キング・オブ・ポップと呼ばれた世界的なアーティストのマイケル・ジャクソンが亡くなった10年前、彼の熱狂的なファンだった志麻さんは、あまりのシヨツ

1979年、山口県生まれ。大阪あべの・辻調理師専門学校と同グループのフランス校を卒業し、ミシュランの三つ星レストラン「ジョルジュ・ブラン」で研修を修。その後、日本の有名フランス料理店などで15年働く。2015年、フリーランスの家政婦として独立。「予約が取れない伝説の家政婦」と呼ばれるようになる。2017年「沸騰ワード10」(日本テレビ系)で一躍話題となり、翌年「プロフェッショナル 仕事の流儀」(NHK)で上半期最高視聴率を記録。著書に「志麻さんのプレミアムな作りおき」(2017年、ダイヤモンド社)、「厨房から台所へ——志麻さんの思い出レシピ31」(2019年、ダイヤモンド社)などがある。

取材・文／高樹ミチ 写真／大橋愛

### 「家庭の食事」をテーマにフランスの食文化を伝える

家政婦になって約5年。志麻さんはフランスの食文化を日本の家庭に広く伝える仕事に

出す。志麻さんの技術はまさに神業。プロフェッショナルな仕事ぶりが多くの人を感動させる。

### 人生を一変させた家政婦の仕事

足掛け15年に及ぶ料理人生活の最後はフランス人が多く集う日本の飲食店だった。そこで一緒に働いていた、後に夫となるロマン・タサンさんと出会う。

料理は会話を楽しみながらリラックスして食べると、より美味しくなる。それには手のかかる料理よりも、煮込み料理やオープン料理など、ある程度放っておいてもできるメニューのほうが相応しい。それを大皿でどんと出す。取り皿も1枚だけで、皿についたソースはパンで拭って食べてしまえば洗い物も少なくて済む。そうすれば皆でゆっくりと会話を楽しむ時間ができる。

この体験以来、志麻さんは高級レストランの厨房で毎日ストイックに料理をしながら、自分が追い求めているフランス料理はきらびやかなレストランの料理ではなく、家族ではのぼりと囲むフランスの家庭料理だということに気付いていったという。



調理師学校の仲間と撮った写真。葛藤しながらも料理を学ぶ毎日が楽しかった時代。

だが、料理人の仲間たちは「なぜ?」、「どうして?」という反応ばかり。

「プロの料理人の目指すところは、シェフになって自分の店を持ち、成功させることです。から無理ありません。私はシェフを目指せなかった落ちこぼれです」と志麻さんは言うが、周りの誰よりもフランスが好きで、フランス料理を究めたい気持ちはずっと持ち続けているながら、それを家庭料理という形で表現する方法が見つからなかっただけだ。

しかし、料理人の世界は狭く、一度離れて

やり甲斐を見出している。

「フランス料理を家庭で味わってもらえるの子どもたちにも本場の味を知ってもらえるのがうれしいし、私がつくり置きをすることで、共働きのお母さんやお父さんが子どもと一緒に食事を楽しむ時間が増えてくれれば、さらにうれしいです。それから料理を取り巻くフランス人の価値観や生活を本で伝えられるのも、

家政婦を始めた頃は考えられない、夢みたいなことです」

こう語る志麻さんをラツキードと思う人もいるだろう。だが、確かな料理の腕とフランスの食文化の知識、それを広めたいというあふれんばかりの情熱が運を引き寄せたのだろう。今でも料理とフランス語の勉強を欠かさない努力の人でもある。

本人いわく「好きなことがあると熱中してしまうタイプで不器用なだけ」とのことだが、なかなか真似できることではない。

「家庭の食事」をテーマにこれからもフランスの家庭料理を追究していきたいという志麻さんは、楽しい会話と笑顔があふれる食卓の伝道者となって、日本のあちこちに家族の団欒を広げていくことだろう。19歳の時、ホームステイ先で見た、あの温かいフランス家庭のような世界を。

たさんししま



# 自然とつくる未来 只見町の挑戦

～福島県只見町と田子倉電力所を訪ねて～

田子倉ダムの貯水池となる田子倉湖。水深が深く、貯水量は国内3位を誇る。

Jパワー田子倉電力所は、福島県南西に位置する南会津郡只見町にある。日本有数の豪雪地帯だが、東北では初となる「ユネスコエコパーク」に登録された。この自然豊かな町を散策してみた。

作家 藤岡陽子 / 写真家 かくたみほ

「ユネスコエコパーク」  
只見町を世界が認めた

雪わり街道とも呼ばれる国道252号を、只見町に向かって車で走る。六十里峠を越え、しばらくすると豊かな水をたたえた田子倉湖が見えてきた。湖を囲む山の緑には夏らしい濃さがあり、その影が風いだ湖面に映っている。

かの大作家、司馬遼太郎さんはかつてこの土地を訪れた際、「壺中天」という中国の語を筆で記したという。その意味は「俗世界とは異なる別天地」というもの。

司馬さんの言葉通り目の前にある湖、山、空の風景は現実を忘れるほど美しく、心が彼方に吸いこまれていく気がする。

只見町は只見川流域にある人口約4000人ほどの町で、近隣を含めた7町村を総称して奥会津と

呼ばれている。

2014年には東北初となる「ユネスコエコパーク」に登録され、只見の自然が世界に認められるものとなった。

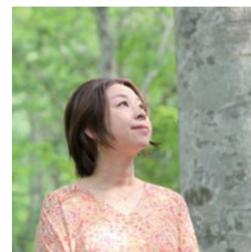
田子倉湖から町の中心に進んでいくと、町の自然を学べる「ただみ・ブナと川のミュージアム」にたどり着いた。車を停めてミュージアムを訪ねてみれば、学芸専門員の遠藤菜緒子さんとブナの木のタペストリーが出迎えてくれる。

ブナとともに歩む  
人間と自然の共生

「ユネスコエコパーク」として認定されるには厳しい条件があるんです。そのひとつが、希少性のある手つかずの自然が残っていること。さらにその自然を持続可能な形で利用した暮らしをしていることなんです。

ユネスコエコパークとは「人間と自然の共生を実践するモデル地域」であることを、遠藤さんから教えていただく。

「戦後、只見町ではブナの大量伐採が行われました。このことに疑問を持った地域住民は、1960



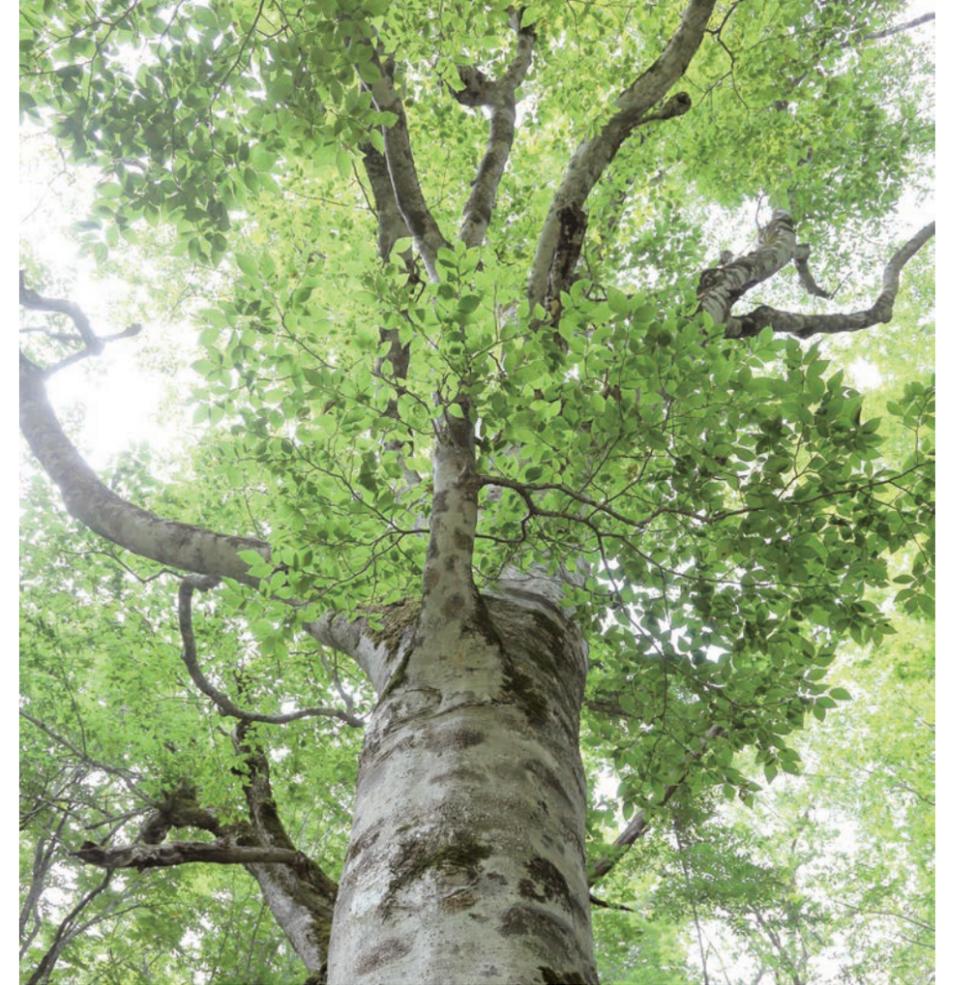
藤岡陽子 ふしおかよこ  
報知新聞社にスポーツ記者として勤務した後、タンザニアに留学。帰国後、看護師資格を取得。2009年「いつまでも白い羽根」で作家に。最新作は『海とジイ』。その他の著書に『手のひらの音符』『満天のゴール』がある。京都在住。



縁結びの三石神社は、お社が巨岩と一体化していた。



只見川の橋から眺めた蒲生岳と只見線の鉄橋。



空に向かって枝葉を広げるブナの大木。樹齢は300年から350年ともいわれる。

年代から森林を守る運動を始めたのです」

2002年、町は京都大学名誉教授の植物学者、河野昭一先生を招聘した。そして河野先生が只見町の森林の希少性を科学的に研究、証明し、運動を成功に導いたと遠藤さんは話す。一方で町は、都会的な近代化を真似るのではなく、ここにしかない町づくり、ブナを核にした地域おこしをしたいと考え、「ブナと生きるまち 雪と暮らすまち」という理念を掲げた地域振興への挑戦を始めた。

半世紀をかけて守られてきたブナ林「恵みの森」を散策した。日盛りなのに森の中は涼しくて、川からはひんやりとした風が流れてくる。落葉でふかふかした林床に数枚の葉をつけたブナの幼木を見つけ、思わず手を伸ばす。周りの成木に比べて葉は薄く、少し力を込めると茎もすぐに折れてしまいうそうだ。いまこうしてまだ弱々しいブナの幼木に触れてみれば、自然は人間が守るべきものだと思ふがされる。

森を出て三石神社に向かっていると、道沿いや家の軒先に色鮮やかな花が植わっているのが目に留まった。ふと見れば「ふるさと花いっぱい運動」と書かれた看板。優しいな、と思う。

ここは温かで明るい場所だ、と。縁結びの神さま、三石神社に続く山道では、野に咲くヤマユリに添え木が施してあった。

100%地元産の米焼酎「ねっか」に懸ける思い

木立をぬうように蝶が舞い、空には鳥がのんびりと羽を広げている。そんな長閑な田園風景の中に立つ蒸留所。こちらで地元の米だけを使った米焼酎がつくられていると聞き、見学させていただいた。「会社の設立は2016年なので、今年で3年目になります。少子高齢化が進んでいく中、田んぼを守るためにどうしたらいいか。始ま

1 只見町の自然や生活文化を展示・解説する「ただみ・ブナと川のミュージアム」。 2 同じミュージアムの学芸専門員、遠藤菜緒子さん。 3 館内には只見町の民具なども展示されている。 4 芽吹いて1〜2年経たブナの幼木。 5 国の重要文化財になっている成法寺観音堂。 6 約300年前に建築された県内最古の農家、旧五十嵐家住宅。 7 田子倉ダムを周遊する遊覧船。 8 湖畔レストラン「田子倉レイクビュー」のダムカレ。



1



2



3



4



5



6



7



8

りはそんな思いからでした」

代表社員の脇坂齊弘さんは、南会津町の酒蔵で16年間酒づくりをしていた醸造技術者。脇坂さんと只見町の農家4人が協力し、合同会社ねっかを立ち上げた。「ねっか」とは地元言葉で「全然」という意味。「ねっかさすけねえー（全然大丈夫）」という前向きな思いが社名には込められている。

他県への視察、蒸留所の建設、特産焼酎免許の申請など諸々の手続きを猛スピードで済ませ、初蒸留したのが17年2月。4月には発売を実現させた。

驚くべきことに米焼酎「ねっか」は初応募した17年に英国で開催された「インターナショナル ワイン & スピリッツコンペティション 焼酎部門」でシルバーメダルを受賞。18年には同コンペティションで再度シルバーメダル、初参加の香港で開催された世界大会（HK IWS C）ではゴールドメダルを獲得している。これらの快挙について脇坂さんは「私たちは地域の人にとり喜んでもらえるかを考えて動いていますから」と微笑む。地元米100%でつくった酒が評価されれば、地域

- 1 合同会社「ねっか」の代表社員、脇坂さん。
- 2 蒸留所内ではちょうど米焼酎が瓶詰めされているところだ。
- 3 米づくりのプロたちがつくった米焼酎「ねっか」。2019年にスペインで開催された「第1回CINQUE日本酒・焼酎コンテスト」で最高賞を受賞！
- 4 長岡藩が所有していたカトリック砲。継之助は家老として抜群の経済センスを發揮。1門が当時約3億円するものを2門所有していた。
- 5 館内を案内して下さる新國さん（左）。只見を「助け合いの町」と仰っていたことが印象に残る。
- 6 継之助が息を引き取ったとされる終焉の間。



福島県の会津若松駅と新潟県の小出駅を結ぶJR只見線。豪雪地で暮らす人々の貴重な移動手段になっている（現在、一部不通区間あり）。

の誇りになる。その気持ちが美味しい酒をつくる原動力となった。「うちでつくった米焼酎のうち、年間3万本が只見町で売れてるんです」

人口約4000人の町で年間3万本が売れるという不思議。「町の人たちがお土産として外に持って行ってってくれるんです。本当にありがたいことです」

会社を起した際も「町のバックアップはとにかく素晴らしかった」と語る脇坂さん。この一体感がこの町の強さなのだと感じる。

### 会津の「英雄」になった 長岡藩河井継之助

冒頭で登場した司馬遼太郎さんがこの地を訪れたのは、『峠』という作品を刊行した後だった。『峠』は幕末を生きた長岡藩の家老、河井継之助の物語だが、只見と継之助にはどのような縁があったのか。その手がかりとなる河井継之助記念館に足を運んだ。

「ここ只見町塩沢は、継之助の終焉の地なんですよ」

長岡藩の家老でありながら、なぜ只見の医王寺に墓があるのか。

そんな疑問が記念館のスタッフ、新國由利さんの説明で解消される。「北越戊辰戦争で西軍に長岡城を奪われた継之助は、会津城下に逃れようと八十里越を越えてきたんです。ですが左足に受けた銃弾の傷が悪化して、この地に立ち寄りました。村医の矢沢宗益の家で療養していたのですが回復せず、そのまま息を引き取ったそうです」

新國さんによると、継之助が只見に滞在していたのはわずか12日間。だが町の人にとって継之助は「会津のために戦った英雄」として偲ばれている。

館内には継之助が亡くなった当時のままの欄間や襖、柱を残す矢沢家の一室が移築されていた。司馬さんが只見町をぶらりと訪れた際、「ここは継之助の眠りの地にふさわしい」と語ったそうだと。死を前にした継之助が感じていたのは無念よりむしろ、安堵だったのかもしれない。

俗世界とは異なる別天地……。そう呟きながら帰路につき、JR只見線の車窓から遠ざかる景色を眺めた。いつかまたこの地を訪れたい。今度は冬の、雪を見に。





1 J-POWER が参画している IPP 案件で最大のウタイガス火力発電所。国内産の天然ガスを使用し、総出力は 160 万 kW (アユタヤ県)。 2 三島由紀夫の小説にも登場した「暁の寺」ワット・アルン (バンコク)。 3 タイ人の同僚と、週に2回ほどバドミントンを楽しんでいる。 4 タイで毎年 11 月に行われる燈籠流し「ロイクラトン祭り」の様子。 5 2012 年に完成した新しい寺院ワット・パクナムは、天井画の美しさで有名。日本人にも人気の観光地だ。 6 小嶋さんがつくったワタリガニのカレー、プーパツポンカレー。 7 現地法人 J-POWER Generation (Thailand) の人たちと一緒に。

# 気軽に相談しあえる関係を目指して THAILAND



**Takahiro Kojima**  
J-POWER Generation (Thailand)  
Assistant Manager 小嶋 隆熙



日本とタイ国の友好を深める

現地パートナーとの橋渡し役

東南アジアの主要国の一つ、タイ国は、自動車産業をはじめとする日本の製造業が多数進出している国としても知られる。J パワーは 1960 年代から同国の発電所建設などのコンサルティング業務で関わり、90 年代からは発電事業への資本参加によって、同国のエネルギーに貢献。現在 J パワーグループが手掛ける発電プロジェクトは 15 件に及び、タイ国の主要な発電事業者として電力安定供給に努めている。

2018 年、タイ国の首都バンコクにある J パワーの現地法人 J パワージェネレーション (タイランド) に向向した小嶋隆熙(おがひら)さんに、現地の仕事や生活について話を聞いた。

「昨年 10 月にパートナー企業であるガルフ (Gulf) 社のオフィスに駐在し、会計や財務の仕事をしています。業務中の会話は英語なので、言葉の障壁はありませんが、タイの会社と日本の会社との間でそれぞれ求められる対応が異なる場合もあり、合意形成に難航することがあります。でも、タイの人は仏教の教えが根付いているためか、他人に優しく親身になって話を聞いてくれます。両社共通の『価値』や『利益』に近づけていくことで必ず合意できる

と信じて取り組んでいます」

そう話す小嶋さんからは、パートナー企業と良好な関係が築けている様子がうかがえた。

苦手でも自分でつくって克服

一方、プライベートはどうなのだろうか。タイ料理といえば辛いことで有名だが、実は小嶋さんは辛いものが苦手。それなのに、小嶋さんは、自分でタイ料理をつくっているのだ。

「食っているうちにタイ料理が好きになってしまい、自分でつくれば辛さも調整できるので、有名なワタリガニのカレー、プーパツポンカレーにも挑戦しました。さらに辛いグリーンカレーや、辛いトムヤンクンも(笑)」

バンコクには日本人の駐在員も多く、日本食には不自由しない。にもかかわらず、小嶋さんは文化のギャップを自ら楽しんでいるのだ。

さらに、現地での娯楽について聞いてみると、タイ人スタッフと週に 2 回、バドミントンをやっている、その活動の中で簡単なタイ語を覚え、冗談が言えるほどには上達したという。

プライベートでもタイでの生活を満喫している小嶋さんに、これからの抱負を聞いてみた。「パートナー企業であるガルフ社に、J パワーとチームを組んでよかったと思ってもらえるようにがんばりたい。お互い困ったときには、仕事上のカウンターパートナーのところにすぐに駆け付け、気軽に相談し合えるような関係を築いていきたいです」

国・近畿にまたがる各事業所や協力会社などに足を運び、現場感覚での「気づき」を得ておくことが重要です。担当者間の意思疎通が障害対応の初動を速やかに、かつ的確にするという経験を何度もしました」

入社から20年、2度の出向を含めて情報通信「筋」に歩んできた入佐直輝さん。新入社員の頃、先輩に教えられた仕事の風儀「段取り8割」を今

## 「通信ネットワークを万全に保ち 電力安定供給を支えています。」

■ J-POWER 西日本支店 四国情報通信所 入佐 直輝

電力会社には基幹ネットワークが2つある。1つは発電所や変電所、送電線などが網の目のようにつながった「電気」の通り道。もう1つがそうした電力設備を保護したり、遠隔地の発電所を監視制御したりするための「情報」の通り道。両ネットワークが密に連携し、健全に働くことで電力安定供給が担保される。

電力設備が全国に点在するJ-POWER

の場合、主にマイクロ波無線と光ファイバーで日本列島をほぼ覆う規模の情報通信ネットワークが安定運用の大きな支えだ。24時間365日、どこかで設備異常を検知すれば障害対応の手を打ち、通信品質の劣化を探り当てたら改善策を講じる。

「そうした異常の兆候は、机上の設備監視システムで察知できます。でも日頃から、当所が管轄する四国・中

も励行する一方、困難にもくじけず、諦めない姿勢がモットーだ。そんな入佐さんの当面の目標は通信分野の資格を取りきること、将来の夢は新規事業の立ち上げという。

「かつて社長より、情報通信は人間にたるとえるとJ-POWERの神経系との言葉を受け、わが意を得たりと深く領き、日々の業務に邁進しています」

取材・文/内田孝 写真/竹見脩吾



POWER PEOPLE

J-POWER 四国情報通信所

◀ 愛媛県西条市 ▶



1 四国情報通信所の無線中継局。対向局からの送信電波を2つのアンテナで受信する方式で通信品質を高めている。2 瀬戸内海を隔てた児島ケーブルヘッド（岡山県倉敷市）へ出向き、通信設備の作動状況に目を光らす。3 マイクロ波無線機や光端局装置などを入念にチェック。4 管轄エリア内の情報通信設備を、運用データとライブカメラ映像により24時間体制で監視できる。5 所内でのミーティング。遠隔地とはTV会議も行うが、現地には積極的に足を運ぶという。

1988年、スウェーデン生まれ。中学時代、世界史の一環として日本史を学び、日本独自の美意識に感銘を受ける。19歳で日本に移住。23歳で見習い庭師となり、26歳で日本国籍を取得し、村雨辰剛に改名。現在、造園業の傍ら、2018年NHK「みんなで筋肉体操」に出演するなど、タレントとしても活動中。

庭師  
むら さめ たつ まさ  
**村雨辰剛**

日本の奥深い庭園文化を  
正しく世界に伝えたい！

平安時代に流行した浄土庭園、鎌倉室町時代に禅宗の影響を受けてつくられた枯山水、江戸時代に大名がさかんに築いた回遊式庭園……。日本庭園は時代によって、あるいは地域によって様々だが、いずれも西洋の庭園とはまったく違う思想と様式でつくられている。その根底に息づく日本特有の美意識と文化は、19世紀のバリ万博で注目の的となって以来、多くの欧米人を



惹きつけてきた。スウェーデンに生まれ、現在、日本で庭師として活躍する村雨辰剛さんも、日本庭園に魅了された一人である。中学生の頃、日本史に興味を持ったことをきっかけに日本語を勉強。来日後、何か伝統的な仕事に就きたいと模索していたとき、縁あって庭師に弟子入りしたのだった。

「日本庭園には深い美意識があるのを感じます。常に新しいもの、きれいなものを追い求める西洋とは違い、時がもたらす変化に価値を置いている点がすばらしいと思います」  
人の手が入っていることを感じさせないほど見事に自然と調和している点も粋の極致であり、日本らしさである村雨さんは絶賛する。  
「親方について庭園づくりを学んできく中で、茶道や華道などをはじめ、日本文化を深く知る必要があると実感しました。例えば、茶室には露地と呼ばれる庭が欠かせませんし、樹木の剪定のために、華道を通じてバランス感覚を磨くことが求められます。日本文化



「ヨーロッパでは廃れた徒弟制度が日本に残っているのも、魅力的。喜び勇んで職人の世界に飛び込んだ」という村雨さん。師匠の教えを胸に刻みながら、5年後、10年後の樹格を考えて木の剪定を行っている。

はやはり奥が深い」

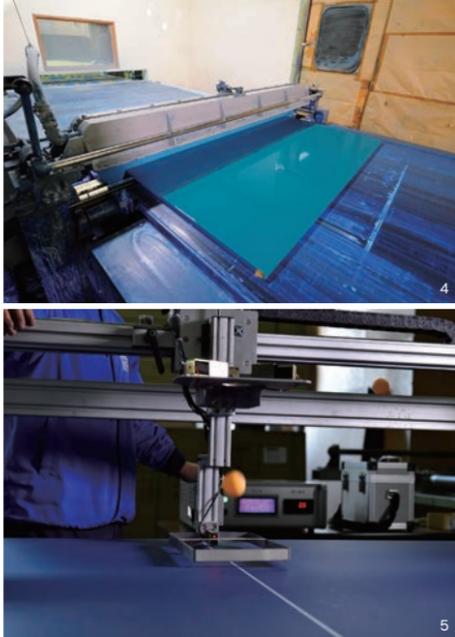
不転の決意で来日して13年目、村雨さんの心はもうすっかり日本人だ。「日本の文化は、世界に誇るべき素晴らしい文化です。私たち日本人は、その魅力をもっと世界へ伝えるべきです。それも、表面的ではなく、本質を正しく伝えなければなりません。そのため何をすべきか。まずは受け継がれてきた伝統に目を向け、学ぶことが大切だと思います」  
日本文化とつながっていたいから、庭師の仕事は一生続けていきたいという村雨さん。そんな若者の奮闘を思いながら日本庭園を眺めれば、古くて新しい何かが見えてくるに違いない。

# 信頼の技術とデザインで 卓球界に新風を

2020年の東京オリンピック・パラリンピックが近づいてきた。男女ともにメダルの可能性の高い競技として注目の卓球競技に卓球台を提供する株式会社三英。日本の卓球台シェアで約75%を超える同社にその思いを聞いた。



リオデジャネイロオリンピックでも使用された「Infinity」は、プロダクトデザイナーの澁川伸一さんのデザイン。



1. 積層材を貼り合わせて、天板をつくる様子。
2. 天板の仕上げは、1枚1枚手作業で行われる。
3. 紫外線を照射し、天板の下地を硬化させる。
4. 天板の塗装。同社の天板はレジュブルーという独特のカラー。
5. ボールをバウンドさせて、天板の精度を検査。



国内では約75%という卓球台のシェアを持つ三英だが、世界でのシェアは大きいとは言えない。そこで同社は2011年、オリンピックで採用されることを目指し、世界中に認知されるような、これまでにないデザインの卓球台の開発に着手した。その際に、材木店だった初心にかえり、「脚部は木製で」というコンセプトは既にあったと栗本さんは語る。

デザインは、ソニーのウォークマンなどで知られるプロダクトデザイナーの澄川伸一さんに依頼。その結果、澄川さんから出てきたのが「X」のような脚部の形が印象的な「インフィニティ」のデザインだった。

これまでにない斬新なデザインだったが、実際にデザイン通りにつくってみると、木製の脚部がスプリングのように反発し、振動が止まらない。そこで合板を使ったり、形を変更するなど試行錯誤を繰り返した。その過程で、合板を曲げる技術で世界的に有名な株式会社天童木工（山形県）の協力を得て、大きなカーブの形状はそのままに、振動がなく強靱な脚部をつくりあげることに成功した。

「リオオリンピックの後には、テレビ局からの依頼で何度も『インフィニティ』を貸し

### 斬新なデザインで 世界へ羽ばたけ！

立された。三英はその後、品質のよい天板の開発に力を入れ、今ではオリンピックの公式卓球台に採用される、世界最高品質の卓球台をつくりあげたのだ。

出しました」

反響は大きかった。だが、1台100万円を超える（オープン価格）高級品だけに、飛ぶように売れるわけではない。

「おもしろいのは、高級旅館や家庭のリビングなど、これまで卓球台が似合わないと思われた場所に置いても違和感がないことです」

そういう意味では、これまでにない新しい市場が生まれたという栗本さん。

「それに『リオオリンピックで使われた卓球台をつくっている』と言うと、営業先での対応が違います。そういう会社なら安心ということで、民間でも公的機関でもお客様からの信頼感が格段にアップしました」

開発にかかったコストを考えると、「インフィニティ」の売り上げだけでは足りないが、それに優る効果があったと栗本さんは言う。

2020年の東京オリンピックでも同社の卓球台が採用されることが決まった。「MOTTI（モティーフ）」と名付けられた新製品は「インフィニティ」以上にインパクトのある製品だという（デザインは2019年秋ごろ発表予定）。その画期的デザインと、それを使う日本代表選手たちのオリンピックでの活躍に期待したい。

#### 株式会社三英

卓球台などのスポーツ用具と、公園などで使用される遊具のメーカー。オリンピックの公式用具サプライヤーは1992年バルセロナ大会以来、リオデジャネイロ大会まで。東京大会でのサプライヤーも決定している。  
http://www.sanei-net.co.jp/

株式会社三英  
経営企画室顧問  
栗本典之さん



### 品質の高さで メダル獲得をサポート

2016年に開催されたリオデジャネイロオリンピックでは、卓球男子シングルスで水谷隼選手が銅メダルを獲得したほか、男子団体や女子団体もそれぞれ銀、銅を獲得して話題となったが、この卓球競技でもう1つ衆目を集めたのが競技で使用された、脚のデザインが印象的な日本製の卓球台だった。

さらに、シングルス銅メダルの水谷選手が「メダルをとれたのは、あの台のおかげ」と語ったとの報道もあった。

この卓球台「Infinity」（インフィニティ）をつくったのが株式会社三英。日本で約75%のシェアを持つ卓球台メーカーの老舗だ。この台の秘密について、同社経営企画室顧問の

栗本典之さんは、次のように語る。

「卓球台のサイズは国際規格で決まっているのですが、さらに天板の反りが3mm以内と決まっています。それだけでなく、ボールのバウンドについても細かくスペックが決まっているんです。弊社の卓球台はこうした厳しい条件を高いレベルでクリアしています」

他社の卓球台の場合、脚部の取り付け部分などでバウンドが変わることがあり、そこを狙って打つ選手もいるのだという。ところが三英の卓球台では、あらゆる部分でバウンドが均一になるように製造されている。さらに、選手に直接影響してくる天板では、デザイン性や安全性はもとより、バウンド性能、バウンドの音、摩擦、光沢などにこだわっている。

「現代の卓球では、ボールの回転とスピードが鍵になります。日本選手たちは三英の卓球台ならば、ボールがどう弾むか、どのくらいの回転をかけるのとどのくらい曲がるかという台の特徴に慣れていたのでないかと思えます」

三英が天板の品質にこだわってきたのは、会社の成り立ちにも大きな理由がある。三英の前身は、1940年（昭和15年）に東京・上野で創業した松田材木店。卓球台を製造していた木工所に材料を卸していたが、木製の天板は経年により反ったり割れたりすることから「経年劣化しない材料はないか」と相談されていた。そこで反りの少ない合板を提案。しかし、価格の問題で受け入れてもらえなかったことから、自社で製造するようになった。その後、卓球台を販売するために62年（昭和37年）、三英商会（現在の三英）が創



一般的な卓球台には、金属の脚部が使用されている。



リオオリンピック・パラリンピックで脚光を浴びた三英の卓球台「Infinity」。

きくたに うたこ

神奈川県生まれ。東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻修士課程修了後、米国カリフォルニア大学サンタクルーズ校へ留学。ニューヨークのアメリカ自然史博物館でのインターンを経て、米国で活動。2001年からは日本で、教科書や図鑑、博物館の展示などのイラストを制作。2002年、ポロニヤ国際絵本原画展（ノンフィクション部門）入選。2010年、絵本『いぬのさんぼ』（福音館書店）を出版。

上右/iPad Pro（タブレット型コンピュータ）を使用して描いた、恐竜の復元図。恐竜の研究は近年、目覚ましく進んでおり、体表や体色についても次第にわかってきている。

上中/月刊誌『たぐさんのふしぎ』の挿絵。野生のサルの様子とその森を描いた圧倒的なリアリティは、マダガスカル取材の賜物。

上左/最新刊である絵本『たぐさんのふしぎ』（福音館書店）。「ロシアの挿絵画家イワン・ビリーピンからヒントを得て、ページデザインを工夫しました」と菊谷さん。

P.38下/インタビューを行ったCoffee House Shakerの外観。菊谷さんのお気に入り。

撮影協力/ Coffee House Shaker  
取材・文/ひだい ますみ  
写真/竹見 脩吾



科学の眼を持つ異才のイラストレーター

菊谷 詩子

サイエンス・イラストレーター

科学書や教科書、図鑑の古代生物や動物のイラスト。

サイエンス・イラストレーターの菊谷詩子さんは最新の科学研究に基づいた恐竜の姿かたちを復元し、哺乳類や鳥類の姿を存在感あふれる独特の筆致で描く。

そんな特殊なイラストを描く道を選んだきっかけは？

仕事のこだわりは？ 菊谷さんの素顔と作品づくりに迫る。

動物の皮膚の感触や体毛一本一本のしなやかさまで伝わってくるリアルなイラスト。最新の研究から浮かび上がった恐竜の復元図。サイエンス・イラストレーターの菊谷詩子さんの作品を教科書や図鑑、展覧会の図録などで目にしたことのある人も多いだろう。「大学院在学中、米国にサイエンス・イラストレーションという分野があり、その養成コースがあることを知りました。専攻していた生物学を生かしつつ、憧れだった美術にも関われる道を見つけ、人生に光が差したようでした」

相談した恩師から「本当にやりたいと思えばできる」と背中を押され渡米を決意、修業を積んだ。サイエンス・イラストは、科学的な内容を正確に描くことが要求される。そのため、自ら文献や資料を集めることも多い。また、研究者とやりとりを重ねて、ミリ単位の修正を施したり、海外に取材旅行へ出かけることもある。気の遠くなるような時間と労力を下調べに費やす菊谷さん。表現方法に

も、ととことんこだわっている。「油彩、水彩、コンピューターグラフィックなど、様々な方法で描きますが、一番楽しいのは彩色の時。スポンジや塩、アルコールなどを用いてテクスチャー（質感）を工夫するのも好きです」

締め切りがギリギリになっても、自分が納得するまで、何度も描き直す。その強いこだわりが描かれる生き物に命を吹き込む。「描く時は、理性を働かせながら、同時に感性も解放する必要がある。同時に感性も解放する必要がある。バランスに気を付けながら、生き物の存在感や、その場の空気感を伝えたいと思います」

児童向けの絵本を丸ごと手掛けてみたいという菊谷さん。どんな「命のあり様」を見せてくれるのか、次回作が楽しみである。



## 米国ジャクソンガス火力発電所建設について

J-POWERは、6月26日開催の取締役会において、米国イリノイ州シカゴ近郊に120万kWのガスコンバインドサイクルであるジャクソンガス火力発電所を建設することを決議し、同日、発電所建設に着手しました。

また、9月10日に、地元関係者やメーカー、建設会社など約100人が参加し、現地で起工式を開催しました。渡部社長はあいさつで「本プロジェクトは最新の技術を採用し、最もクリーンで効率的な発電所となる。地域、そして米国の繁栄に貢献する」と決意を表明しました。

J-POWERは、2005年に米国現地法人であるJ-POWER USA Development Co., Ltd.を設立し、長期売買契約付の新規案件や自由化市場向けピーク電源の権益買増案件など、米国における10年以上の発電所運営経験を活かし、2016年以來、自社開発案件としてジャクソンガス火力発電所の開発を進めてきました。現在、2022年4月の営業運転開始を目指して建設工事を進めています。本開発事業は、米国で最も大規模な自由化市場であるPJM※1市場内のComEd※2地域において、J-POWERが2007年から運営参画してきたエルウッド発電所の

隣地に発電所を建設するものです。ジャクソン開発地点は、大需要地であるシカゴ都市圏近傍です。ジャクソンガス火力発電所は、J-POWERにとって米国市場では累計12件目、PJM市場では同5件目となります。

J-POWERは、2015年に発表した中期経営計画に基づき、自由化の先進市場であり、豊富な事業機会が見込める米国において、多様な販売形態を取り入れながら業容拡大を図るとともに、2025年度の海外持分出力1,000万kWの実現



を目指して、海外発電事業を推進していきます。

※1 PJMは、米国東部地域における独立系統運用機関 (Independent System Operator) で、北米最大の卸電力市場の運営、電力システムの運用を行っている。運営地域はその名の通りペンシルベニア・ニュージャージー・メリーランドから始まり、現在はデラウェア・イリノイ・インディアナ・ケンタッキー・ミシガン・ノースカロライナ・オハイオ・テネシー・バージニア・ウェストバージニア・ワシントンDCを含んでいる。

※2 ComEdは、PJMにおける西端のゾーン名称。送電事業者であるCommonwealth Edison社の管轄地域 (イリノイ州北部) であることからComEdゾーンと呼ばれる。



起工式の様子。現地時間9月10日、米国イリノイ州ウィル郡にて、晴天のもと起工式を開催しました。(写真左からシカゴ総領事代理田中賢治氏、J-POWER USAマーク・コンドン社長、J-POWER渡部社長、イリノイ州下院議員ラリー・ウォルシュ氏、三菱日立パワーシステムズ土師俊幸執行役員)

ジャクソンガス火力発電所プロジェクト概要	
場 所	イリノイ州ウィル郡エルウッド村、シカゴ市街地より南西約70km
発電方式	ガスコンバインドサイクル
出 力	120万kW (60万kW×2基)
燃 料	天然ガス
事業会社名	ジャクソン・ジェネレーション社 (Jackson Generation, LLC)
販 売 先	自由化市場であるPJMにてマーチャント運営
着工時期	2019年6月26日
運 開 時 期	2022年4月 (予定)
出 資 比 率	J-POWER 100%



こじま なお  
東京都出身。2004年角川短歌賞受賞。2007年第一歌集『乱反射』により現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。2011年、第二歌集『サリンジャーは死んでしまった』刊行。居合道初段。

## 「音」のソノリテイ」を詠む

— 小安峽大噴湯 —  
(秋田県湯沢市)

歌人 小島 なお



秋の小安峽は紅葉の名所でもある。J-POWERは他社と共同で、秋田県湯沢市で山葵沢地熱発電所を運営しています。写真：山口博之/アフロ

水音は私をしるい舟に乗せ遠い昔へ運んでくれる



あああ。ごごお。しゅうう。あたり一面真っ白い湯気を立ち昇らせながら、あちこちで噴出する蒸気。

秋田県湯沢市。ここは小安峽大噴湯と呼ばれ、渓谷に切り立った岩の亀裂から、蒸気や熱湯が噴き出す世界でも珍しい地形である。遊歩道が整備され、その迫力を間近で体感することができるといふ。

岩の割れ方や大きさ、蒸気量、そして噴出の勢い。これらの条件によって様々な音が生まれる。霧状の蒸気が勢いよく噴出する箇所、小さな噴水のように真上に熱湯が湧出する箇所、岩肌を滑り落ちる滝となるほど湯の嵩の多い箇所。そしてそれらの音の背景に聞こえているのは、溪を流れる川の水音。

ほとぼしり、揺蕩う水のエネルギーは、私たちを原初の時間へ誘ってくれる。

※「音のソノリテイ」第752回放映(小安峽大噴湯)を観て詠んでいただいたものです。

世界でたった一つの音  
音のソノリテイ

J-POWERは、首都圏で放送中のミニ枠テレビ番組「音のソノリテイ～世界でたった一つの音～」を提供しています。「ソノリテイ」とは、フランス語の音楽用語で「鳴り響き」の意味。日本の自然風景から、その場所できくことのできない音を紹介しています。

日本テレビ系列  
毎週日曜日 20:54～など  
BS日テレ  
毎週水曜日 20:54～(再放送)

## 長崎県西海市沖、北海道檜山エリア沖における洋上風力発電所の開発可能性調査について

J-POWERは、住友商事株式会社と共同して、長崎県西海市沖洋上（平島および江島周辺）において、洋上風力発電所の開発可能性を確認すべく、7月6日～8月26日の間で、海底地盤調査を実施しました。本年度より施行された「再エネ海域利用法（注1）」に基づき、国は現在、風力発電事業者を公募で選定するエリア（促進区域）の指定に向けた検討を進めています。本海域は風況も良好で、水深も比較的浅いことから、国内における有望な候補地点のひとつと考えられており、本海域において地盤構造を把握し、風車基礎構造物の設計に必要な情報を取得するために、地域の方々をはじめと

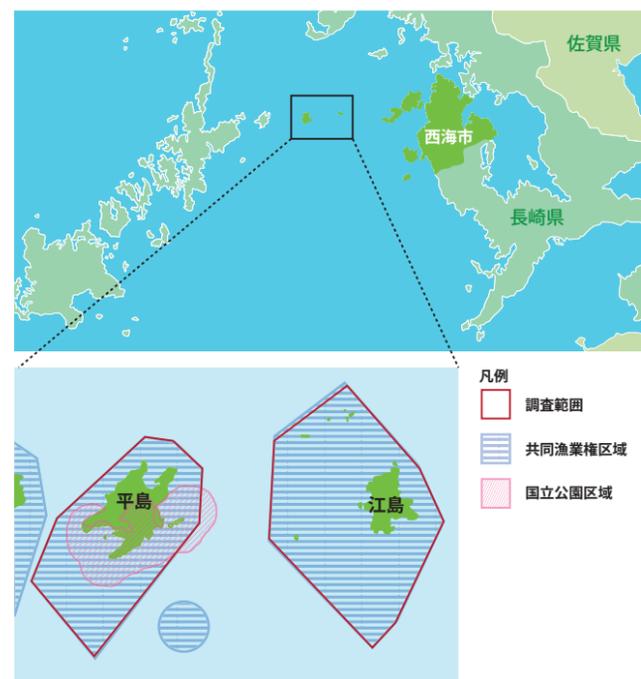
する関係者のご理解を得ながら、海域ボーリングや音波探査等を実施しました。またJ-POWERは、北海道檜山エリア沖（久遠郡せたな町、二海郡八雲町、爾志郡乙部町、檜山郡江差町、檜山郡上ノ国町）においても、8月26日より、9月中の完了を目指し、海底地形調査（深淺測量）を実施しています。当地域においては、陸上で2005年に瀬棚臨海風力発電所、2014年には上ノ国ウインドファームの運転を開始しており、現在、せたな大里ウインドファーム、上ノ国第二風力発電所を建設中です。これら陸上風力発電所に続き、洋上風力発電所の開発可

能性調査を目的として、地域の方々をはじめとする関係者のご理解を得ながら、調査を進めています。

J-POWERは、今後も洋上風力発電の導入ポテンシャルが大きい一般海域（注2）において、同様の調査実施を計画しており、これからも国内外で培った知見や経験を活かし、地球環境にやさしい風力発電所の開発を推進していきます。

（注1）再エネ海域利用法：海洋再生可能エネルギー発電の整備に係る海域の利用の促進に関する法律のこと。  
（注2）一般海域：領海・内水のうち、漁港、港湾区域などを除く海域。

長崎県西海市沖調査概要	
調査位置	長崎県西海市崎戸町平島および江島周辺の共同漁業権区域内（国立公園区域を除く）
調査項目	海底地盤ボーリング調査：海上に設置したSEP（Self Elevating Platform：自己昇降式台船）から、ボーリングにより、地盤構造及び地質性状を把握 音波探査：作業船が発信する音波の反射状況を受信・計測することにより、調査範囲内の地盤状況を把握



北海道檜山エリア沖調査概要	
調査位置	北海道檜山エリア沖（久遠郡せたな町、二海郡八雲町、爾志郡乙部町、檜山郡江差町、檜山郡上ノ国町）
調査項目	深淺測量 ・ヘリコプターに搭載したレーザー測深機による計測 ・調査船に搭載したナローマルチビーム測深機による計測



## 宮城県大崎市高日向山地域における地熱発電の資源量調査の開始、岩手県八幡平市における安比地熱発電所の着工について

J-POWERは7月1日から、宮城県大崎市高日向山地域において、将来の地熱発電所開発を目指し、小口径調査井掘削調査を開始しました。高日向山地域は設備更新工事を進めている鬼首地熱発電所に隣接する地点であり、2018年度に実施した地表調査の結果に基づき、本年度より小口径調査井を掘削し、地熱資源の賦存を確認していきます。

また、J-POWER、三菱マテリアル株式会社（以下MMC）、三菱ガス化学株式会社（以下MGC）との共同出資会社である安比地熱株式会社（以下安比地熱）は、8月1日に安比地熱発電所の建設工事を開始しました。安比地熱は、環境へ配慮した地熱発電所（出力14,900kW）の建設により、CO<sub>2</sub>排出量抑制と電力安定供給に貢献するため、2024年4月の運転開始を目指し、安全を最優先に工事を進めていきます。J-POWER、MMC、MGCの3社による地熱発電共同事業は、5月20日に営業運転を開始した山葵沢地熱発電所（秋田県湯沢市）に続き2地点目となります。

J-POWERは、2018年6月に再生可能エネルギー本部を設置し、水力・風力などを含めた再生可能エネルギーの

取り組みを強化しています。地熱発電については、天候に左右されず年間を通じて安定した電気を供給することが可能な純国産の再生可能エネルギーで

あり、わが国における電力の安定供給と地球温暖化対策に貢献すべく、地熱発電所の開発を引き続き推進していきます。

高日向山地域調査計画概要	
調査場所	宮城県大崎市高日向山地域
調査内容	小口径調査井掘削調査（坑井掘削、仮噴気試験、ならびに付帯工事）
調査期間	2019年7月～2021年7月（予定） （各年度の調査は関係者の方々のご理解をいただきながら実施していく予定です）

※本調査（2019年度分）は独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の平成31年度地熱発電の資源量調査事業費助成金交付事業に採択されています。  
（http://www.jogmec.go.jp/content/300362255.pdf）



安比地熱株式会社概要	
社名	安比地熱株式会社
設立年月日	2015年10月9日
所在地	岩手県八幡平市大更第18地割129番地1
資本金	100百万円
出資比率	MMC 51% MGC 34% J-POWER 15%



安全祈願の様子（写真右：右から安比地熱有木社長、MMC小野社長、MGC藤井社長、J-POWER渡部社長）

